

日本語が亡びるときについて

野村幹弘

参考文献：日本語が亡びるとき～英語の世紀の中で 筑摩書房 水
村美苗 2008年

第1章 アイオワの青い空の下で〈自分たちの言葉〉で書く人々

やがて二台のマイクロバスが前後して着いた。見ると、西洋人のほとんどが一つのバスに向かい、わずかに遅れて、そろって黒髪を頭に載せたアジア人たちが、ぞろぞろともう一つのバスに向かっている。(4p)

国語として普遍語である英語を使う人たちと、国語が現地語である人たちの違いを象徴している。

地球のありとあらゆるところで、さまざまな作家が、さまざまな条件のもとで、それぞれの人生を生きながら、熱心に、小説や詩を書いている。(26p)

本能的に、人間は〈自分たちの言葉〉で書く動物である。

言葉には力の序列がある。一番下には、その言葉を使う人の数がきわめて限られた、小さな部族の中でしか流通しない言葉がある。その上には、民族の中で通じる言葉、さらにその上には、国家の中で流通する言葉がある。そして、一番上には、広い地域にまたがった民族や国家の間で流通する言葉がある。(中略) 一つ目の異変は、下の方の、名も知れぬ言葉が、大変な勢いで絶滅しつつあるということである。(中略) 二つ目の異変は、今までには存在しなかった、すべての言葉のさらに上にある、世界全域で流通する言葉が生まれたということである。それが今〈普遍語〉となりつつある英語にほかならない。(48p)

ボツワナのほとんどの人にとっての〈母語〉はツワナ語と言う言葉である。

だが、ツワナ語は、日本人にとっての日本語がそうであるような意味においての〈国語〉ではない。ツワナ語は、ボツワナがイギリスの植民地だったころは、〈現地語〉でしかなく、英語が唯一の「公用語」だったのである。(54p)

だから、ここで登場するボツワナの作家は〈自分たちの言葉〉ではなく、英語で執筆していた。同じことが日本でもおきるようになるのか？

第2章 パリでの話

ところが、あるとき、すべてが終わってしまったのです。突然のことでした。私はもう「Par Avion」と書こうとしませんでした。「Air Mail」と書くようになったのです。(74p)

フランス語が〈普遍語〉から〈国語〉の一つ変化していく様を象徴している。

そもそも日本近代文学の存在が世界に知られたのは、日本が真珠湾を攻撃し、慌てたアメリカ軍が敵国を知るため、日本語ができる人材を短期間で養成する必要にかられたのが一番大きな要因である。(101p)

翻訳の重要性を示そうとしている。

第3章 地球のあちこちで〈外の言葉〉で書いていた人々

まずは〈普遍語〉。(中略)二つ目は〈現地語〉。(中略)三つ目は〈国語〉。(105p)

英語を〈母語〉とする人間は、自分が〈母語〉で書いているとき、実は自分が〈普遍語〉でも書いていることにしばしば気づかないものである。(117p)

人類の叡智は普遍語で蓄積される。

二重言語者になるべきは、そして、真になれるのは、自分が知っている以上のことを知りたい欲求の強い人である。同じホモ・サピエンスのなかでも叡智を求める欲求の強い人たち-優れて〈叡智を求める人〉たちである。(127p)

〈国語〉の父とよばれるようになる人のほとんどを特徴づけるのは、かれらが〈普遍語〉の流暢な操り手であったとすることであり、優れた二重言語者であったかれらは、広い意味での翻訳者、しかも優れた翻訳者にほかならなかった。(137p)

さまざまな〈国語〉で学問することは、ほんとうに可能なことであろうか？
(138p)

言葉そのものに依存しないがゆえに、〈学問〉においては蓄積された〈真理〉は、最終的には、別の言葉に置き換えた「教科書」・〈テキストブック〉で学べるものなのである。(152p)

第4章 日本語という〈国語〉の誕生

それでは、そもそもなぜ日本語がはやばやと、名実ともに〈国語〉として成立しえたのであろうか。(157p)

日本の書き言葉の成熟と印刷技術との説明がされている。外的要因としては、植民地化を逃れたとのことである。

それは、西洋語という新たに登場した〈普遍語〉に蓄積された知識や技術や叡智を、いち早く、日本の言葉に置き換えて移すことにあったのである。(185p)

植民地化を逃れるためには、漢字を排除したり、英語で教育を行うような余裕がなかったので、日本語が国語となった。

第6章 インターネット時代の英語と〈国語〉

ほんとうの問題は、英語の世紀に入ったことである。これから五十年後、さらに百年後、さらに二百年後、そのような〈叡智を求める人〉が、はたして〈自分たちの言葉〉で〈読まれるべき言葉〉を読み続けようとするであろうか。(239p)

悪循環がほんとうにはじまるのは、〈叡智を求める人〉が、〈国語〉で書かなくなるのではなく、〈国語〉を読まなくなるからである。(254p)

第7章 英語教育と日本語教育

日本語が「亡びる」運命を避けるために何をすべきか。(266p)

〈国語〉としての日本語を、学校教育を軸に護るべきである。そのためには、〈読まれるべき言葉〉として日本語を教育すべきであろう。

以上